we support!
RQ 災害教育センター
MONTHLY
「東北に黒潮を送ろう！大作戦しんぶん」改め
復興支援 かわらばん『すけさきた』しんぶん
「すけさきた」とは宮城県登米市あたりの言葉で「ボランティアに来たよ」という意味である
APRIL 11 2013

歌津地区は8.7mの堤防で海と隔てられることになる

震災からの生活復興がなかなか進まない中、東日本大震災の沿岸部では、巨大な防潮堤が造られようとしています。

その高さを目の当たりにして、海が見えない巨大堤防がある土地に人は幸せに住めるのか、観光客は訪ねたいと思うのか、と改めて思いました。地元の人は堤防建設に反対したくても、日々の生活に精一杯で、反対運動を進める余力がまるでないそうです。運動を進める若い人も仲間も足りないという切実な問題もありました。

（RQメールマガジンより）

被災地で進められる巨大堤防計画

海の見えないふるさと／生態系は守られるのか

「崎浜大漁唄いこみ」の伝わる唐桑地区にも11mの防潮堤の計画が

気仙沼市唐桑のある港のそばで「見てください、あれが建設計画のある防潮堤の高さですよ」と教えられたのが、宙に浮かんだオレンジ色のテープでした。11メートルの高さを示しています。

これは唐桑に限ったことではありません。三陸沿岸一帯、高低差はあれど防潮堤が何千億と言う高額な建設費を投じて建設されようとしています。

しかし、海が見えないほどの巨大な防潮堤も、簡単に橋脚を破砕した水の力に勝てるものかどうか、判断がつきません。地元の方はどう感じているのでしょうか？

引いてみるとこんなかんじ（11mの位置に点線を加筆）

みんなが無関心でいれば、間違いなく平成26年には着工、10年後にはふるさとの海は見えない時代がやってきます。そのときに、海の生態系がどうなっているのか想像もつきません。

日本人全体で、人間の浅知恵が自然の大いなる力の前では無力だということを、つい最近学んだばかり。人間が助かればほかの命や自然の営みは後回しとなることのないよう、慎重の上にも慎重な討議が十分になされることを希望します。

（聞き書きチームブログより）

文責：井上文子（西表島エコツーリズム協会　東北復興支援担当）